

熱れてゆく夏

藤堂志津子

熱れてゆく夏

藤堂志津子

著者略歴

一九四九年札幌市生れ。本名、熊谷政江。藤女子短期大学卒。現在、広告代理店パブリックセンターに勤務。著書に詩集『砂の憧憬』（自費出版）、中篇小説集『マドンナのごとく』（一九八七年度北海道新聞文学賞、講談社刊）など。

熟れてゆく夏

一九八八年十一月二十日 第一刷
一九九一年五月十五日 第十一刷

著者 藤堂志津子
とうどうしずこ

発行者 豊田健次

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二
電話東京（〇三）三二六五局一二二―

印刷 大日本印刷 製本 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

© Shizuko Tōdō 1988
ISBN4-16-310640-5

Printed in Japan

熟れてゆく夏〈目次〉

鳥、とんだ
7

熟れてゆく夏
61

三月の兎
159

あとがき
188

熟れてゆく夏

装画——三嶋典東
装幀——坂田政則

鳥、
とんだ

この皮膚病のきざしが現われはじめたのはいいつつごろからなのか、美沙子は杓文字型の赤い木製の柄のついた犬用のブラシを手にしたまま、足もとに横たわっているサスケを呆然とみおろした。

今年六歳になる雑種犬のサスケは、玄關先の地面のうえに心地良さそうに四肢を投げだし、安心しきった様子で眼をとじ、横腹をのびやかにひろげている。全身すきまなく密生しているふさふさとした茶褐色の毛が、秋の午後の陽をあびて、ところどころ黄金色に光る。ふと、おもいがけなく秋の風が渡る。すると陽ざしを存分に吸いこんで、のどかにふくらんでいた毛並みに乱れが生じ、片方にたわみ、あるいは四方八方によりわけられてゆく。

美沙子の眼が気づいたのはそのときだった。たつぷりとゆたかな尾の、その付け根の部分がまるくはげている。ゆっくりと尾を持ちあげてみた。肛門のまわりの無毛の箇所がふしぜんなひろがりを示している。毛の脱け落ちた跡に、手でふれる、とたちまちに熟れておちてきそうな濃い

桃色が露呈している。それが太いみみずのように這いのぼっていき、尾の付け根へとつながっていた。

美沙子はうろたえながら、両手の指先で用心深く毛をかきわけていった。それはくちのそばの短く硬い毛並みのなかにも、うずもれていた。二本の後肢の外側にもそれぞれひとつずつ、歪んだ楕円形がみつげだされた。どの部分もただれてはいたが膿^{うみ}んではない。

だが右の耳の状態は美沙子を愕然とさせた。耳殻^{じかく}の内側をはしるうねりのあいだには黄色い膿^{うみ}がこびりつき、じくじくとした透明な粘液がまんべんなくぬりたくられている。柔毛を剥ぎとられた皮膚は薄桃色に腫れている。つまみとついていた手をはなすと、耳はおじぎ草のようにちぢまって、内側のみにくさを恥じるように伏せられてゆく。その点検のあいだ、病みくずれた耳の異臭は妻まじく鼻腔を刺戟しつづけた。

美沙子はサスケから手をはなし、ぼんやりと彼をみつめた。気配を察して、サスケがかかるく首をあげ、みつめ返してくる。その右の眼にも、ちいさな輪郭をとけながしてしまいかのような黄色いめやにがびっしりとはびこっていた。

美沙子は、この家をでて、よその土地で暮していた一年間のながさを、あらためておもった。

帰ってきたのは昨夜だった。電話での話どおりに、母親はおとこの朝、数人の仲間と連れ立って旅行にでかけてしまったらしく、美沙子を迎えてくれたのはサスケだけだった。

「まただめだったのかい!!」と、二週間まえの電話で母親は金切り声をあげた。家に戻ってもい

いだろうか、と美沙子がおずおずときりだしてすぐの反応がそれだった。

「まあね、あたしはもうあんたにはなんにもいいたくはないよ。小娘じゃあるまいし、あんたももう二十七だ。親がとやかくいってもきくような齡ごろでもないし、だいたいが親のあたしのいうことを素直にききいれるような人でもないからね。しかしねえ、あんたももう少し上手くやれないものかねえ。男なんてもんはどれも似たようなものさ。そこんとこのツボを心得て、下手にでるようなふりをしながらがつちりしつぽを握ってりゃあ、もうこっちのものなんだよ。あたしは今度こそはとおもっていたんだがねえ。だから早く籍をいれちまえばよかったんだ。そうすりゃあちつとやそつとのことじゃ切れないし、そのうちまたヨリが戻るもんなのさ。ほんとにあんたはあたしの娘とおもえないよね、あたしなんぞは、若いときにゃあ……」

母親のお喋りはしばらくつづいた。美沙子にはききなれた、若く、華やかであった日々の自慢話だった。

ひとしきり喋りちらし、娘からきかされた話の憂さが晴れたらしい母親は、十月のはじめに踊りの仲間数人と旅行にでかける手筈になっているからそのあいだに帰ってくるとこちらの都合も良いと言い、電気やガスの支払い料金のこととか、持ちアパート二軒の家賃取り立ての手配などを早口にまくしたて、最後に声をひそめて、もううものはもらっておけとそそのかし、電話をきった。

受話器を置いてから、美沙子は、あの男とは別れたのか、と尋ねるのを忘れていたことに気づ

いた。もし、あの中年男がいまだに通ってきているなら、家には戻りたくなかった。といって、ほかに身を寄せる心当りがあるわけでもない。

美沙子が昨夜十時すぎに家に帰りつき、着換えもせずのままきにしたことといえば、あの男のために母親が誂あづえたゆかたや安物のウールの袴あはせ、下着類などが詰められていた母親の居間の整理簞笥たんすのなかを調べることもあった。それらは一枚のこらず処分されていた。おそらくそのまま質に流してしまったか、クリーニング屋に洗い張りにだしたのち、だれかに安く売りつけたのだろう。母親のきりかえの素早さと抜け目のなさは、いつの男のときもそうだった。

母親の居間につづく八畳の座敷には二棹ふたせうの和簞笥と、亡夫の位牌のあがった仏壇が置かれてあった。昨夜おそく、美沙子は仏壇に線香を立て、ながいあいだ父親に語りかけ、少しばかり泣き、そして床に就いた。

「耳がこんなふうになってきたのはいつごろから？」

美沙子の声には、母親に叩きつけた腹立ちが籠められていた。

サスケの耳の病は今度が始めてではなかった。六年まえの春はやく、路上に捨てられていた、まだ肢腰のさだまらない幼いサスケを家に連れて帰り、なんてみともない犬ころだろうと繰返す母親を憎みながら、心を傾けて育てていたその年の冬に、サスケはもう右の耳を腐らせていた。気づいたとき、耳の内側は今回と同じ状態にまで悪化していた。毎日相手をしながらのその迂闊うがくさは否めなかったが、毛脚けあしのながさも傷をみつげたくさせていた。

「ひどい臭いじゃないか！ 早く医者にみせるか、それでもだめならさっさと保健所に引き取ってもらうかしておくれよ。」

母親の甲高い声にせき立てられながら、美沙子は職業別の電話帳を繰り、家からもっとも近い家畜診療所を探した。運良くバス停留所から三つさきとおぼしき住所の診療所がみつかった。

その日のうちに、美沙子はサスケの紐を引いて家をでた。牡丹雪のふる午後だった。雪片は赤ん坊の掌のおおきさでコートばかりではなく顔にまで貼りついてきた。

訪ねていった診療所には瘦せた七十がらみの老獣医がひとりいるだけだった。老人は白衣もおらず、薄汚れた灰色のカァディガン姿でサスケに近づいた。サスケは獣医を寄せつけなかった。吠え立て、暴れ狂った。口輪をはめることさえ不可能だった。ついには老獣医も癇癇を起こし、こめかみと額に青筋を走らせ、まるで相手が犬だということを忘れてしまったように声を荒らげた。美沙子はうろたえ、なだめようとしたが、サスケはいっそう猛りつづいてゆく。

やがて獣医は、遠くから眺めただけの診断だから利くかどうかは保証できないというようなことを言い、美沙子の手に放り投げるようにして白い薬袋を渡してきた。美沙子がいわれたとおり金額を手渡すと、まだ怒りが鎮まらないのか、老獣医はとりつくしまもなく、診療室の奥の扉のむこうへと歩み去ってしまったのだった。紙袋のなかには十日分の飲み薬が入っていた。帰る道でもまだ雪はふりしきっていた。

薬の効果はめざましかった。が、サスケはその錠剤をまるのままではけっして飲みこまなかつ

た。必ず吐き捨てた。好物のソーセージのなかに菓を詰めこんで与えると、どうにか咽喉を通ららしい。毎朝ソーセージに仕掛けをしている美沙子を見ると、母親は必ず嗤ったものだった。

「あたしが病気になってもこれほど親身に世話をしてくれるかねえ。あんな犬畜生のどこがいいのか、まるで自分の子供みたいな気の使いようじゃないか。」

かつての母親のことを憶い出しながら、美沙子は、いまふたたび耳をおとしかけているサスケの横腹をゆっくりと撫でさすった。

そう、これはわたしの子だ。

サスケを拾うまえの年、美沙子ははじめて身籠った子を始末していた。うめる子ではなかった。うむ、うまないと迷いあぐねる以前に、その子の芽生えに戦慄していた。彼女以上にふたりのあいだの子を怖れていた相手には告げる必要はなかった。墮せ、というこたえはわかりきっていた。剥きだしのそのことを突きつけられたくはなかった。言われた瞬間、ふと相手を憎みそうな気がした。

美沙子はだれにも打ち明けることなくだまって病院の門をくぐった。手術台のうえのゴムの冷たい感触、強いられした姿勢、術後に寝かされていた病室の、白いペンキが藻屑のように垂れ下っていたささくれ立った天井、病院のそとへでたとたんに、かっと照りつけてきた脂の塊のような真夏の太陽、あぶら汗をにじませてめまいに耐えていた舗道のかわいた白さ——はたちの年の記憶といえ、これらの情景ばかりがそそり立ってくる。そのあくどい色合いはかなり褪せかけて